

さんしょうだゆう

## 山椒大夫

もりおうがい  
森鷗外

越後えちごの春日かすがを経て今津いまづへ出る道を、珍めずらしい旅

人の一群ひとむれが歩いている。母は三十歳さいをこえたばかりの女で、二人の子供こどもを連れてついる。姉は十四、弟は十二である。それに四十くらいの女中が一人ついて、くたびれた同胞はらから二人を、「もうじきにお宿にお着きなさいます。」と言はげって励まして歩かせようとする。

二人の中で、姉娘あねむすめは足を引きずるようにして歩いているが、それでも気が勝つかっていて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折折おりおり思い出したように弾力だんりよくのある歩きつきをして見せる。近い道を物詣ものまいりにでも歩くのなら、ふさわしくも見えそうな一群ひとむれであるが、笠かさやら杖つえやら、かいがいしい出立いでたちをしているのが、誰だれの目にも珍めずらしく、また気の毒どくに感ぜられるのである。